

司式:長原 光
奏楽:吉田千鶴子

前奏:「高きにあります神にのみ栄光あれ」(J.S. バッハ)

招詞:わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある。(詩 124. 8)

讚美歌:57「ガリラヤの風かおる丘で」

交読詩編 34 篇 (アルファベットによる詩)

- 01 【ダビデの詩。ダビデがアビメレクの前で狂気の人を装い、追放されたときに。】
- 02 どのようなときも、わたしは主をたたえ/わたしの口は絶えることなく賛美を歌う。
- 03 わたしの魂は主を賛美する。貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。
- 04 わたしと共に主をたたえよ。ひとつになって御名をあがめよう。
- 05 わたしは主に求め/主は答えてくださった。脅かすものから常に救い出してください。
- 06 主を仰ぎ見る人は光と輝き/辱めに顔を伏せることはない。
- 07 この貧しい人が呼び求める声を主は聞き/苦難から常に救ってください。
- 08 主の使いはその周りに陣を敷き/主を畏れる人を守り助けてくださった。
- 09 味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。
- 10 主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない。
- 11 若獅子は獲物がなくて飢えても/主に求める人には良いものの欠けることがない。
- 12 子らよ、わたしに聞き従え。主を畏れることを教えよう。
- 13 喜びをもって生き/長生きして幸いを見ようと思む者は
- 14 舌を悪から/唇を偽りの言葉から遠ざけ
- 15 悪を避け、善を行い/平和を尋ね求め、追い求めよ。
- 16 主は、従う人に目を注ぎ/助けを求める叫びに耳を傾けてくださる。
- 17 主は悪を行う者に御顔を向け/その名の記念を地上から絶たれる。
- 18 主は助けを求める人の叫びを聞き/苦難から常に彼らを助け出される。
- 19 主は打ち砕かれた心に近くなり/悔いる霊を救ってください。
- 20 主に従う人には災いが重なるが/主はそのすべてから救い出し
- 21 骨の一本も損なわれることのないように/彼を守ってください。
- 22 主に逆らう者は災いに遭えば命を失い/主に従う人を憎む者は罪に定められる。
- 23 主はその僕の魂を贖ってください。主を避けどころとする人は/罪に定められることがない。

朗読聖書①詩編 106. 44-46

- 44 主はなお、災いにある彼らを顧み/その叫びを聞き
- 45 彼らに対する契約を思い起こし/豊かな慈しみに従って思いなおし
- 46 彼らをとりこにしたすべての者が/彼らを憐れむように計られた。

朗読聖書②マタイによる福音書 25. 31-40

◆すべての民族を裁く

- 31 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。
- 32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、
- 33 羊を右に、山羊を左に置く。
- 34 そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。
- 35 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、
- 36 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』

- 37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。』
- 38 王は、旅しておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。
- 39 王は、病気をなすったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』
- 40 そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

祈祷

私たちの贖い主にして全知全能なる主イエス・キリストの父なる神さま。今朝、私たちの名前を一人ひとり呼び、あなたの御前に集め、ライブ配信とこの場にあつて、降誕前第 6 主日礼拝、特に今朝は特別伝道礼拝をあなたに献げる時を与えてくださりまして感謝を致します。

あなたは、^{いにしよ}古の昔より、あなたの自由な選びによって選ばれた人々を、あなたの子供とし、恵みを以てこれを導き、大いなる業を以て養い育ててくださいました。しかし、今の私たちと同じように、あなたに呼び集められた者が、皆、あなたによって与えられた恵みに応えることなく、心を頑なにし、偶像を拝み、自分自身を神として、あなたから遠ざかった生活をしてきたことを懺悔を致します。

あなたはしかし、恵みを以て私たちの罪を赦すために、独り子イエス・キリストを人間として、私たちと同じような地上の歩みを為さしめ、十字架の死によって私たち全ての人類の罪を赦し、3 日に復活を遂げさせて、私たちに永遠の命を約束してくださいました。この大いなる御業はあなたが古に、エジプトよりイスラエル人を導き、海を割き、約束の地カナンに導いてくださったことにもまして大いなる業であります。このあなたが示してくださいました愛と恵みと慈しみを私たちは、想像を超えて推し量ることができません。ただ、あなたの大いなる愛の前に、かしこみ跪くのみでございます。どうかあなたの聖名が賛美され、あなたの御国を求める兄弟姉妹を多くしてください。

私たちはこの地上の歩みにおいて、そのような多くの罪を知り、また新たに向き合おうとしておりますが、隣の人に愛を注ぐこと少なく、却って傷付けてしまうことの多い毎日です。どうかあなたが聖霊を送り、私たち自身をあなたの僕として、自分自身を神とするのではなく、生活の大部分をあなたの御言葉によって養われる生活へと導いてください。

今、世界では軍事力や経済力を背景にして、強い者たちが、その夫々を第一として、^{まつりごと}政を行っております。どうかその中では、少数の者、貧しい者、多くのハンデを負った者たちが虐げられるようになってしまいません。どうか父なる御神さま、世界中の政を司るリーダーたちを、あなたが御心を以て導き、正しい判断に入らしてください。特に多くの戦争によって失われる命があります。どうかあなたが、この戦争を一刻も早く止めることができますように、どうか私たち一人ひとりをもお用いくださいますように。

今朝は特別伝道礼拝として野田美由紀先生をお遣わしくださったことをまことに感謝致します。あなたがこの礼拝の中心に居まして、聖霊を野田先生に注ぎ十二分にあなたの御言葉の説き明かしができますようにお導きください。また聞く私たちの心を開き、あなたの御言葉によって、この一回りの歩みができますように、どうか上よりの御助けをお願い致します。

この礼拝に様々な事情で集えない多くの兄弟姉妹が居ります。どうかその方々の上に、また再びあなたに共に礼拝を献げる日を待ち望みつつ、その場であって私たちと変わらない恵みの内に置いてください。

この拙い感謝と祈りを、主イエス・キリストの聖名によってお祈り致します。アーメン。

讚美歌432「重荷を負う者」

説教「この最も小さい者の一人に」

野田美由紀

秋が深くなり気がつけば今年も残り一ヶ月半となりました。本日、この場に招かれて信濃町教会の礼拝を共に献げることができ心より感謝致します。

私は現在、東洋英和女学院宗教部長という立場で、主に横浜にある大学の方で仕事をしております。今年の3月迄は、横浜のフェリス女学院中学校高等学校で長年務めておりましたし、その前には金沢市にある北陸学院高等学校に勤めておりました。更にそれ以前に、こちらの信濃町教会で牧師会の末席を汚していたのは、もう30数年前で、当時の牧師方をはじめ、教会の方々にはいろいろとご心配、ご迷惑をお掛けした新米伝道者でしたのに、この大事な礼拝の説教者としてお招きいただいて恐縮しています。信濃町教会の講壇で私事を話すことは基本的にあまりしなかったと思いますので自己紹介はこのぐらいにしておきます。

今朝は、マタイによる福音書 25 章 31 節以下の御言葉から、ご一緒に聞いて参りたいと思います。このマタイ 25 章には、今朝の箇所の前に主イエスが語られた二つの喩え話が語られています。1 節以下の「十人の乙女のたとえ」と 14 節以下の「タラントのたとえ」は、夫々結構有名ではないかと思えますし、礼拝の説教などにおいては単独で取り上げられることが多い、むしろそれが普通だと思います。しかし、これらは前の 24 章から続いている『終末』についての教えの一部だと言えます。そしてその主題は、先ほどお読み頂いた今朝のテキストにも繋がっている、というより、31 節以下のこの記事において締め括られていると言ってよいと思います。因みに、今朝のテキストは 40 節までと致しましたが、本来は 46 節まで、25 章の終りまでで完結するものです。これについては後ほど触れさせていただきます。

新共同訳聖書の小見出しで、「すべての民族を裁く」と言われているこの話は、その前の二つの記事とは違って、いわゆる喩え話ではありません。確かに主イエスの数々の喩え話と比べるとこれは異質です。同じマタイ 25 章にある「十人の乙女のたとえ」では、婚宴の席に向かう花婿を待つ乙女たちが登場し、「タラントのたとえ」では、主人が僕たちに財産を預けて旅に出るのですが、どちらの記事でも、そのストーリーと登場人物は主イエスが或るメッセージを語るための、まあ、言ってみれば舞台装置に他なりません。言い換えると、そこで主イエスが語られたメッセージは、喩えのストーリーや登場人物の設定によって生き活きと伝わることは確かですが、そのストーリーや登場人物に限定されるわけではなく、より普遍性を持つものなのです。今朝のテキストである 31 節以下は、そういう喩えとは違います。もっとも、この箇所にも若干の比喩要素があるので、人によってはマタイ 25 章には終末に関する三つの喩えが記されているということもありました。念の為に付け加えますが、先ほどから言っている『終末』とはもちろんウィークエンドではなく、歴史の終わり、聖書の歴史観によれば、主イエスが再び世に來られて救いを完成される時、またはその救いの完成そのものを

意味します。時々“終末時計の針がまた進んだ”というようなニュースが報じられたりします。そこで言われる『終末』とは、おそらく“世界人類の滅亡”という意味だと思われそうですが、キリスト教における『終末』は、それとは違い、“神さまによる救いの完成”を意味します。

さて、主イエスはこの話を「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、」という言葉で始めています。まるで誰もが知っている当たり前の事柄を語るような調子で、本当にそうかどうかはその場で聞いていなのでわかりませんが、そのような調子で話し始めているかのように思いますが、これは他の喩え話と違います。ちょっとしつこくて申し訳ありませんが、もう一度、25 章の喩えを引き合いに出しますと、「十人の乙女のたとえ」も、「タラントのたとえ」も、最初に「天の国は次のようにたとえられる」という前置きがされています。まあ、必ずしもすべての喩えでそのように言われるわけではありませんが、そこでははっきりしています。主イエスは「天の国のたとえ」を話されたのです。“それでは、さっき言っていた『終末』についての喩えというのはなんだ？ 話が違うじゃないか”と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、まあ、「天の国」、マルコやルカの福音書では「神の国」と呼ばれますが、それがイコール『終末』とは言えませんが、“終末において人が天の国に入れられる者とそうでない者とに分けられる”ということで、前二つの喩えは、その“分かれ目”を示しています。十人の乙女や主人の財産を預かる僕たちは、何がその分かれ目となるかを表すための設定ですが、先ほど言ったように、このシチュエーションや人物設定は絶対的で置き換え不可能というわけではありません。しかし、31 節以下の話は、別の場面やキャラクターに置き換えることができず、このまま聞く他ありません。

で、31 節の「人の子」とは、主イエスがご自身を指して用いる言い方です。文字通りには“人間の子”、つまりは“人間である”ということの意味する言葉です。主イエスは神の子であり、“真の神”とも呼ばれる方ですが、地上にお生まれになり、生きておられる限りは、“真の人”でもあることであることを示そうとされたのでしょうか。ご自分を「人の子」と呼ばれることがあったのです。したがって、ここで“栄光に輝いて天使たちを従えて来られ、栄光の座に就かれたのは主イエスだ”と考えられます。もっとも、この呼び方は最初の部分で 1 回しか出てきませんし、この場面の主イエスが、地上で人として生きたナザレのイエス、いわゆる歴史のイエスを指しているわけではないことは確かです。

続いて、「すべての国の民がその前に集められると、」とあります。小見出しにも出てくるように、ここで「人の子」の前に集められ、裁きの座につくのはユダヤ人だけとかキリスト者だけではなく、すべての民族のすべての人々です。礼拝の中で、信仰の告白として『使徒信条』が詠まれるというか、唱和されることがあります。週報の 2 面に載せられていますが、その『使徒信条』に、「かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。」という言葉があります。これは主イエスが再び世に來られて、いわゆる『最後の審判』をなさるということですが、今朝の聖書箇所で開催されているのは、まさにその最後の審判の場面です。その審判の時に、全ての国の民が審き主である方の前に集められるのです。そしてその人々は、「羊飼いが羊と山羊を分けるように」分けられ、「羊」は「右」に、「山羊」は「左」に置かれます。聖書の中で、特に旧約聖書で「羊飼いは主要な職業であり、羊や山羊はがポピュラーな生き物だったので、この比喩が用いられているのでしょう。先ほど言いましたが、この話に僅かに用いられている比喩の要素はここにあります。ただし、羊

と山羊の分類にそれほどの意味はなく、上下や貴賤の別、羊は尊く山羊は卑しいといった認識があるわけではないようです。むしろ区別は「右」と「左」というところであって聖書においては、「右が上位」とされます。まあ、右大臣と左大臣とでは、左大臣の方が位が高いという日本の伝統的な考え、習慣とは逆です。これも『使徒信条』の中で、「主は十字架につけられ、死んで葬られ、甦って天に上り、全能の父なる神の右に座しおられる」と言われています。

「神の右」とは、「神さまと共に支配する座」ということです。ですから、右側に分けられた人々が祝福の言葉を受け、左側の人々は今朝の個所には入れませんでした。が、「呪われた子ども(41節)」と呼ばれるのです。そこで「栄光の座」、「審き主の座」とも言えますが、そこに着いたのは「王」と言われ呼び方が変わっています。これはおそらく元来は二つの喩え、また伝承があって、それらが組み合わせられたのだらうと考えられています。ここから先はずっと「王」という呼び方が為されているので、そちらでお話しした方が良いでしょう。「王」は右側にいる人々に言います。

「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」

「右側の人々が何を受け取るか、それはなぜか」、ということが一気に告げられています。彼らは「父なる神に祝福された者たちだ」とまず言われます。そして「天地創造の時から用意されている国」、これは「天の国」、「神の国」と考えられるし、一言で「救い」と言ってもよいでしょう。それを「受け継ぐように。」と言われるのです。「わたしの父」が神さまを指すことは明らかで、神さまを「わたしの父」と呼び方は主イエス・キリストに他ならない。ですから、繰り返しますが、ここで「王」と呼ばれるのは主イエスです。主イエスは王であり、審きを行う者として描かれています。その審きの結果、ある人々を祝福し、彼らのために「天の国」を用意しておられるのは、まあ「父なる神さま」と考えてよいのでしょう。因みに、「審く」という言葉は、「断罪する」、つまり「有罪とする」という意味で使われることも多いのですが、使徒信条で「生ける者と死ねる者とを審きたまわん。」と言われているように、すべての人が審きの座に集められるわけで、そこで「救いと滅びに分ける」というのが本来の意味です。では、右側に分けられた人々が祝福され、天の国を受け継ぐ者とされたのはなぜか、王はその理由、もしくは根拠を彼らに語ります。繰り返しますが、

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。

ここは原文のギリシヤ語では——新約聖書はギリシヤ語で書かれている——もっとシンプルに語られています。直訳しますと

わたしは飢えていた。お前たちは食べる物を与えた。わたしは渇いていた。お前たちは飲み物を与えた。わたしはよそ者だった。お前たちはわたしを家に迎えた。といった感じだ。

三番目の理由として、「旅をしていたとき」<ケノス(ἐνοσ) [外国のよその]>と新共同訳聖書であるのは少々意識で、最新の翻訳である聖書協会共同訳聖書ではストレートに、「(私が)よそ者であったときに宿を貸し」と訳されています。「飢えている人に食べ物を出し、のどが渇いている人に飲み物を提供する」というのは、私たちが出来ないことではない、というか、「できることならしたい」と

思う、また「しようとする」ことではないでしょうか。例えば、「ガザで飢えている人々、特に子供たちに食べさせることができるなら食べさせたい」と思う人は多いでしょうし、災害の被災者や貧困のために食べる物に窮している人々に手を差し伸べたいと思う人、実際に差し伸べている人もいらっしゃると思います。少し前まで、NHK朝の連続テレビ小説で、『やなせたかし夫妻』をモデルとしたドラマを放送していました。ご覧になった方もいらっしゃるでしょう。戦争経験者『やなせ』さんが「逆転しない正義」とは何かを考え続けた答えとして、「お腹をすかせた人にパン・食べ物を与えるってところに辿りつき、アンパンマンを生み出した」という話が描かれていました。「飢えた人に食べさせる」というのは、実際には必ずしも簡単なことは言えませんが、私たちが為し得る誠意というか、愛の行為ということができるでしょう。

「渇いた人に飲ませる」というのも同じです。日本には「お金を湯水のように使う」という或る国や地域では考えられないような表現がありますが、安全な水が手軽に手に入れられるわけではない、という環境では、一杯の水を差し出すことが命を救い永らえさせる重要な行為となることもあります。ここでは「飲ませる」という動詞だけで「何を飲ませるか」言われていません。それは「食べさせる」ことについても同じです。基本的には、「人が生きて行くために絶対必要な水」と考えてよいのだらうと思います。このマタイ福音書10章42節で、主イエスは「わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」と語っています。そこにはまた別の意味も込められていますが、主イエスの弟子ではなくても渇いている人に水を飲ませることは、間違いなく愛の業と言えるでしょう。

「よそ者」、あるいは「旅人に宿を課す」という話は、旧約聖書ではよく出てきます。現在の日本のような国では、見知らぬ人を家に泊めるというのは結構ハードルが高い行為ではないかと思えます。まあ、いつでもそのような状況に対応できるという方は少ないと思いますが、正直に言えば私もそうです。聖書においては、「旅人に宿を貸す」ということが、「信仰において求められる善い業」と考えられていました。新約聖書でも、『ヘブライ人への手紙』13章(2節)で「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。」と言われているので、その思想は受け継がれていたようです。「飢えた人に食べさせ、渇いた人に飲ませる」という言葉と並んで言われているわけですから、「よそ者」として、「寄る辺のない状況にある人を家に招き入れる」ということが考えられているのでしょう。

「裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」と「王」は続けて言います。まあ、現在の日本で私たちが道を歩いていて裸の人に出くわすということはほとんどないし、もしあったら警察を呼ぶという事態になりそうですが、これも「まともに身を覆う物を持たない状況」と考えた方が良いでしょう。やはり有名な主イエスの喩え話の一つで、『善いサマリア人のたとえ』と呼ばれる話が『ルカによる福音書』(10:25-37)にあります。追剥に襲われて服を剥ぎ取られ半殺しにされた人を通りかかったサマリア人が助ける話ですが、追剥に襲われた人は当然裸また裸同然だったわけで、その人を助けて宿屋に連れて行ったサマリア人は傷の手当てをただけでなく、何かしらその人に着せかけたのだらうと考えられます。まあ、いずれにしても私たちの日常生活でそうそう出会うことではありませんが、切実に必要とする物を与えるという点では、食べ物、飲み物と同じことかもしれません。

「病気の人を見舞い牢にいる人を訪ねる」というのは、「より積極的な善意の行為」と言うことができると思えます。教会の信徒同士、あるいは家族や友人、知人の間柄であれば、当然、病見舞いに行くことはありますし、万一何

かの事情で拘留されたとしたら、面会に行くということも、よりレアなケースですがあるでしょう。まあ、そういう関係がなくても出掛けて行くというのはなかなかできないことだと思いますが、しかし、全くあり得ない話というわけではないと思います。「王」の祝福の言葉とその理由を聞いた人々は「正しい人々」と呼ばれています。つまり、ここに述べられた行為は「正しい行い」と考えられているのです。しかし、彼らは本当に正しい人だったようで、「王」の言葉を鵜呑みにして、単純に喜ぶことはせずに問い返しています。

主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさせたり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。

つまり、彼らは「王」に対して“そのような行いをした覚えはない”と言っているのです。そうである以上、“約束された天の国にいそいそと入って行くわけにはいかない”と彼ら思ったのです。まあ、突飛な連想がかもしれませんが、私は『金の斧、銀の斧』というイソップの話思い出します。この正しい人たちは、自分が落としたのではない金や銀の斧を返されても、それを喜んですぐに受け取ることはできない正直者なのでしょう。しかし彼らは“王が飢えているのを見て食べさせ、喉が乾いているのを見て飲ませ、旅をしているのを見て宿を貸し、裸でいるのを見て着せ、病気をしたり牢にいたりたりするのを見て訪ねた”という覚えは確かにありませんでしたが、そこで言われたような行いを一切したことがないわけではなかったのです。“いつあなたに対してそんなことをしましたか？”という彼らの問いに「王」は答えます。

「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」

右側に置かれた人々は「王」に対して、あるいは“主よ”と呼びかけているので、“主に対して”と言ってもよいでしょうが、直接何かをした訳ではありませんでした。しかし、“飢えている人に食べ物差し出し、渇いている人に飲み物を与え、寄る辺のない旅人・よそ者に宿を貸し、着る物もない人に着物を与え、病気の人や牢に入れられた人を訪ねる行い”は、実際にしたことがあったわけです。そして、そのことを全く記憶していなかったわけではないにせよ、この審きの場で持ち出されるなどは思いもせず、つまり、“神さまの目に留められることなど意識せずに行った”、ということだと思います。

私たちは、多少なりとも人の目、世の中での評価というものを気にして、無意識にでもそれを基準として行動しているところがあると思います。人が見ていなければ、何をしても良いと思わないにしても、やはり人目を気にして、ルール違反や自分勝手な行為を控える。そして人が見ているところでは、一人の時よりもきちんと振る舞う、といったことはあるかと思えます。ここで言われているような行為を人が見ているからするということはあまりないかもしれませんが、逆に、誰かの目があるということで、いわゆる善い行い、親切な行いをするのもちょっと躊躇してしまう。偽善者のようで、またそう見られるのが嫌で却って体が動かない、というようなことも、もしかしたらあるかもしれません。私としては、たとえ偽善的な部分がなくはないとしても、偽悪より良いというか、そう見られたとしても、また自分でそう感じたとしても、人を助ける行為ができるならした方が良く頭では考えますが、いずれにしても、全く人の目を気にしないというのは難しいことだと思います。ですから、この正しい人たちが、報い

を求めるところか、自分のしたことを覚えてもないほどに当り前のこととして愛の行いをしたとすれば、それは素晴らしいことであり、神さまに祝福され、天の国を受け継ぐと言われるのも当然ではないかと思えます。

とは言え、私たちはそんな風にならぬように愛の行いをするような、純粋で無欲な人間にならなければ、神さまに「善し」とされないのでしょか。そのような人が、そのような方が、実際にいないわけではないでしょうし、そのような人に成れば良いとも思いますが、主イエスはここでそのような人になれと命じておられるのか、というと、少し違うのではないかなというふうに思います。

この主イエスの言葉の中で、私たちがもっとも注目すべきなのは、やはり最後の「王」の言葉ではないかと思うのです。「王」は「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」と言っています。この「最も小さい者の一人」とは誰でしょうか。或る人は、これは新約聖書の時代、迫害され、様々な窮乏に苦しみ、そして時には投獄されたりもしていた伝道者、キリスト者のことだと考えます。先ほど少し触れたマタイ10章の「わたしの弟子だという理由で、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は報いを受ける」という言葉からすると、そのように考えることもできるかと思えます。しかし、“すべての人が審き主なる主イエス・キリストの前に集められる”と言われるこの場面で、そのように限定する必要はないのではないのでしょうか。この世で貧しい人、差別され阻害された人々、病む者や友のない人に近づき、その友となって生きられた主イエスのことを考えれば、「最も小さい者の一人の範囲を、そんなふう狭くなくとも良いように思います。主イエスはまず、ご自分を信じ、ご自分に従う者、「わたしの兄弟」と呼べる者だけをお招きになり、次いでその人々に善い行いをした人を祝福され救いに入れられる、というわけではないと思うのです。そうではなく、欠乏と困難を抱え、助けを必要とする者を、「わたしの兄弟」として、ご自分をそこに重ね、その人々を助ける愛の行いをした人々に、それはもしかしたら本当に小さな自分でも覚えていないようなことかもしれません。その人々に、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと」と言ったださるのだと思います。

コルカタの聖女(Saint Teresa of Calcutta)などと呼ばれたマザー・テレサのことをご存知の方も多いいと思います。彼女はマケドニア生まれ、修道女となってインドの裕福な子女が通う女子校の校長をしていました。しかし、当時のインドには路上で誰にも看取られることもなく死を迎える人や今よりもっと酷い差別の中で苦しむハンセン病患者の方たちがいました。マザー・テレサは、貧しい人々の中の最も貧しい人に仕えることを自分の使命と信じ、校長の立場を投げうってコルカタの街に出て行き、死を待つ人の家やハンセン病の人々のための施設を開きました。マザー・テレサにとっては、“路上で死に行く人々やハンセン病で苦しむ人々の中に主イエス・キリストがおられる。それゆえ、彼らに仕えることはキリストに仕えることだ”と信じていたのだと思います。マザー・テレサだけではありません。助けを必要とする人に関わり、小さな、別に小さくなくてもいいのですが、愛の業を行うとき、“それは私にしてくれたこと”と主イエスが言ったださるという言葉は、多くの人に覚えられ、いろいろの場で用いられています。クリスマスの時期に教会学校などでよく読まれて劇が演じられたりする『くつやのマルチン』もその一つです。いずれも困っている誰かを助けた人に対して、“あの時、あなたはわたしにしてくれたのだ”と主イエスが語りかけられるのです。

41 節以下は、ちょうどこれまで読んできた話を反転させたような感じでは、[王]は、左側の人々に厳しい言葉を投げかけ、“お前たちはわたしが飢えていた時に食べさせず、喉が渇いたときに飲ませず、旅をしていた時に宿を貸さず、裸の時に着せず、病気の時、牢にいた時に訪ねてくれなかったからだ”と、有罪宣告の理由として彼らがしなかったことを述べます。ここでも、そう言われた人々は、“自分たちが何時、王に対してそういうことをしなかったか”と反論します。愛の行いをしていても自覚がなかった人々がいるならば、それをしなかった人々は、まして思い当たるフシがないというのはある意味当然です。そして、私たちは誰も、自分がこの左側の人々の中に入らないとは言いきれないのではないのでしょうか。しかし、王は厳然と彼らに言います。「はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである」(45 節)。これはある意味で恐ろしい言葉だと思います。私たちは誰も、あの時、あの人のためにすべき善いことをしなかった、またはできなかった、という覚えが多少はあると思いますが、それよりも、しなかったことを覚えてもない、自覚してもないということの方がはるかに多いと思うからです。私たちはしなかった言い訳を並べ立てるかもしれませんが、こんなに厳しい審きなど、とてもまとも受け止められないと、ここを聞き流して、通り過ぎるしかないかもしれません。でも、主イエスは私たちに絶望させる為にこの様な言葉を語られたのかというと、おそらくそうではないと思います。ですから、やはり私たちが最も注意して聞き、心に留めるべきなのは、40 節の王イエス・キリストの言葉ではないかと思うのです。

この世で窮乏し、顧みられることが少なく、助けを必要とする人の中に主は居られ、その人を“わたしの兄弟”と呼び、その人に対する愛の業を、「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと」と言われるのです。

私たちが今、助けを必要とする人のために何を為し、また、何を為さずにいるか、それをすべて主が見ておられる、ということは、考えるに確かに恐ろしいことです。しかし、一方、主は私たちの為す小さな愛の業、隣人に対するささやかな奉仕に目を留め、それを“わたしにしてくれたこと”と呼んでくださるのです。もちろん、私たちはいつも助ける、差し出す側にいるわけではなく、助けを必要とする「最も小さい者」の一人になることがあるかもしれません。その時も主は私たちに対して助けの手を延ばしてくれた誰かに、「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことだ」と言ってくださるでしょう。

だとすれば、私たちはいたずら審きを恐れるのではなく、その主の眼差しが、私たちにも向けられていることに慰めと希望を持つことができるのではないのでしょうか。与えられている恵みを、なんのために、誰のために用いることができるか、如何に用いるべきか、時に迷い、躊躇い、しばしば臆する私たちに、主は小さな一歩を踏み出す力を与えてくださるのだと思います。私たちの人生に、この主の眼差しが注がれていることを覚え、自分が出会った隣人と、主の恵みを分かち合うことができればと願います。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。御国を来たらせてください。今日、私どもに新しい命を与え、また信濃町教会の礼拝へと招いてくださいましたことを感謝致します。

あなたから多くの恵みを頂きながら、それを隣人と分かち合うことができず、またあなたも喜ばれるように用いることも少ない私共ですけれども、どうぞ今朝の御言葉にあったとおり、「この最も小さい者の一人にしたのは、わた

しにしてくれたこと」と言ってくださる主の恵みを覚え、あなたの恵みを隣人と分かち合う、その生き方へと踏み出すことができますように、一人ひとりを強めてください。

この礼拝の場を覚えつつ、共にすることもできない方々の上にも、あなたの恵みが豊かにありますように。

礼拝の時を感謝して、主イエス・キリストの聖名によってお祈り致します。アーメン。

讃美歌:575「球根の中には」

献金・感謝(芳賀文子)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

御在天の父なる神さま、尊き聖名を崇め賛美致します。どうぞ御国が来られますように。

降誕前第 6 主日の今朝、ライブ配信を通して、また礼拝堂にて主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝致します。

今朝は特別伝道礼拝として、野田美由紀先生の口を通して、『この最も小さい者の一人に』と題した説教を戴きました。説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。主の眼差しが向けられていることに感謝し、人の目を規範とするのではなく、あなたに目を向けて行動することが出来ますように。また世の生き辛さを感じる人に、あなたに仕えるように、愛の行為を、そして寄り添うことができますように。

この御言葉が、私たちのこの 1 週間を、夫々の旅路の中で糧として歩むことができますように。また、今朝初めて見えられた方々にも、この御言葉の種が心の中にしっかりと播かれ育ちますように。

私たちは、必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から、感謝と献身のしるしを御前にお献げ致します。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった『主の祈り』を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福:主があなた方を祝福し、あなた方を守られるように。主が御顔をもってあなた方を照らし、あなた方を恵まれるように。主が御顔をあなた方に向けて、あなた方に平安を賜るように。主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなた方一同とともに豊かにありますように。アーメン。

報告:午後の伝道集会案内ほか。

後奏:「天にまします我らの父よ」(J. S. バッハ)